

水分神社の祭祀と信仰

—万葉集の成立基盤としてのヤマトの信仰的世界観—

大 石 泰 夫

序

延長五年（927）完成の『延喜式』に記載される「祝詞」は、飛鳥・藤原京時代（672～710）に制定されたものと推測されている。これらの祝詞には、ヤマトに祀られる地名を冠した同名の神が伝えられている。すなわち、御県・山口・水分の神である。これらと全国の神社名を記した同書の「神名帳」をあわせて検討してみると、これらは他国にはあまり例がなく、ヤマトに集中して祭祀されていることがわかる。しかも宮廷直轄領である御県に祀られた御県神社は、ヤマトの国中の平地を取り囲むように分布しており、それを取り巻くように山口神社が祀られ、水分神社はさらに高地の分水嶺に祀られている（図表2参照）。つまり、この三種の神は、ヤマトの国中を中心にして同心円のように分布しているということになる。こうしたことからこの神々の祭祀は、ヤマトの信仰的世界観を表すものとして注目されてきた。

例えば、ヤマトの信仰に神体山信仰をみようとする景山春樹は、神体山信仰は山宮（奥つ磐座）と里宮（中つ磐座）と田宮（辺つ磐座）によって形成され、それらがそれぞれ水分神社・山口神社・御県神社に相当すると説く¹。また、菌田稔は、こうした神社群の中央部に鎮座する広瀬大忌神社が御膳神を祀って生業神としての性格をみせていることに注目し、「大和地方一帯の風土が、宗教的なコスモロジーの原空間として神社祭祀上に把握されていたとすれば、それは一方で、御県社・山口社・水分社の順に扇状の広がりが指摘されるとともに、他方で、いわば扇のかなめとして広瀬大忌神社が重要な風土的神格とみなされていたと考えられる。」とする²。

しかし、景山のように神体山信仰とこの三種の神を結びつけるとするなら、一つの神体山に三種の神社が存在して成り立つのであり、こうした事例はない。つまり、この論は一つの神体山をもとにした地域内で成り立つ理論であり、ヤマト全体に分布する同種の神社を一括してそのように括ることには疑問がある。また、菌田のいうように「大和地方一帯の風土が、宗教的なコスモロジーの原空間として神社祭祀上に把握されていた」というようなことを、地域の民俗的発想と捉えるにはあまりにも広すぎるようと思われる。

伊藤高雄はいう。

水分社や山口社、御県社それが、本来葛城山東麓の人々の信仰によって祀られた聖地ではあっても、その顕著な分布のありかたには、在地の民俗のレベルを超えた、大和朝廷による律令体制の側からの、〈権力〉による統一的な世界把握の方向が見て取れるのである³。

要するに、伊藤はそれぞれの神社の信仰に在地の民俗的な発想を認めながらも、その顕著な分布のあり方には大和朝廷による統一的な世界観の構築をみようとするのである。早くに御県・山口・水分の分布に注目した櫻井満は、その中に位置する御県の県主⁴が天皇家と深い関係にあることに注目し、そこから奉られる寿歌が万葉集に基づいたとする論を展開している⁴。櫻井も風土的な基盤を認めつつも、大和朝廷の政治的なあり方をみてとろうとしているのである。

結論的なことを早く述べてしまったが、いずれにしても大和朝廷がこれらの神をいかにして祀り、

それが地域及び少し広域的な範囲の中でいかなる神としての信仰を有しているのかということを、丹念に解きほぐして考察する必要があろう。

本稿は、これら御県神社・山口神社・水分神社の中から、水分神社の祭祀と信仰を中心に論じていくことにしたい。

1. 『延喜式』の御県神社・山口神社・水分神社

まず、『延喜式』の御県神社・山口神社・水分神社の記述を確認したい。

○祈年祭・月次祭の祝詞

御県に坐す皇神たちの前に白さく、高市・葛木・十市・志貴・山辺・曾布と御名をば白して、この六つの御県に生い出する甘菜・辛菜を持ち参り来て、皇御孫の命の長御膳の遠御膳と聞こし食すが故に皇御孫の命の宇豆の幣帛を称え辞竟え奉らくと宣う。

山口に坐す皇神たちの前に白さく、飛鳥・石村・忍坂・長谷・畠火・耳無と御名をば白して、遠山・近山に生い立てる大木・小木を、本末打ち切りて、持ち参り来て、皇御孫の命の瑞の御舎を仕え奉りて、天の御蔭・日の御蔭と隠れ坐して、四方の国を安国と平らげく知ろし食すが故に、皇御孫の命の宇豆の幣帛を称え辞竟え奉らくと宣う。

水分に坐す皇神たちの前に白さく、吉野・宇陀・都祁・葛木と御名をば白して、辞竟え奉らくは、皇神たちの依さし奉らむ奥つ御年を、八束穂のいかし穂に依さし奉らば、皇神たちに、初穂をば穎にも汁にも、甌のへ高知り、甌の腹満て双べて、辞竟え奉りて、遣りをば皇御孫の命の朝御食・夕御食のかむかひに、長御食の遠御食と、赤丹の穂に聞こし食すが故に、皇御孫の命の宇豆の幣帛を称え辞竟え奉らくと、諸 聞き食えよと宣う。

○四時祭（上）

右、神祇官の祭るところ、幣帛は一の前の件により、数を具えて官に申せ。三后・皇太子のみかんぎ御巫の祭る神各八座はみな 鑿を案上に 奠れ。ただし臨時に加減せよ。仍りて恒の数に入れず。大神宮、度会宮には各馬一疋を加えよ〈籠頭の料に庸布一段〉。御歳の社に白馬・白猪・白鶲各一を加えよ。高御魂神、大宮女神、および甘樅・飛鳥・石村・忍坂・長谷・吉野・巨勢・賀茂・当麻・大坂・胆駒・都祁・養布等の山口、ならびに吉野・宇陀・葛木・竹谿等の水分の十九社には各馬一疋を加えよ。

○臨時祭

祈雨の神の祭八十五座〈みな大〉

…巨勢山口社一座 葛木水分社一座 賀茂山口社一座 当麻山口社一座 大坂山口社一座
胆駒山口社一座 胆駒社一座 石村山口社一座 耳成山口社一座 養父山口社一座
都祁山口社一座 都祁水分社一座 長谷山口社一座 忍坂山口社一座 宇陥水分社一座
飛鳥社四座 飛鳥山口社一座 畠火山口社一座 吉野山口社一座 吉野水分社一座…
座別に絹五尺、五色の薄絰各一尺、絲一絰、綿一屯、木綿二両、麻五両、裏薦半枚。社毎に調布二端〈転の料〉、夫一人。

以上の内容と、現行の神社の調査結果を表にしたもの（図表1）である。

祝詞（祈年祭・月次祭）によって、三種の神の性格を整理すると次のようになる。御県の神は、御県で産出する「甘菜・辛菜」の農作物（採取物）を天皇の食に供しており、それが故に祭祀すると記される。山口の神は、朝廷施設への建材供給と諸国安定を祈念するための神と伝える。水分の神は、

(図表1)『延喜式』所載の御県神社・山口神社・水分神社一覧

○御県神社

	人名帳記載名	現 社 名	祈年祭 (四時祭)	祈年祭 (祝詞)	月次祭 (祝詞)	祈雨神祭 (臨時祭)	現行祭日等
1	高市御県神社	高市御県神社 (橿原市四条町宮ノ坪)		○	○		11/13無格社
2	葛木御県神社	葛木御県神社 (葛城市新庄町葛木)		○	○		9/ 9村社
3	十市御県坐神社	十市御県坐神社 (橿原市十市町)		○	○		5/ 5村社
4	志貴御県坐神社	志貴御県坐神社 (桜井市三輪字金屋)		○	○		9/ 7村社
5	山邊御県坐神社	山辺御県神社 (天理市別所町) (天理市西戸堂町大門)		○	○		10/ 1村社・宮座 10/15村社・宮座頭屋祭
6	添御県坐神社	添御県坐神社 (奈良市歌姫町) (奈良市三碓町)		○	○		10/10村社・宮座 10/13村社・宮座
7	久米御県神社三座	久米御県神社 (橿原市久米町字宮ノ谷)					10/15村社

○山口神社

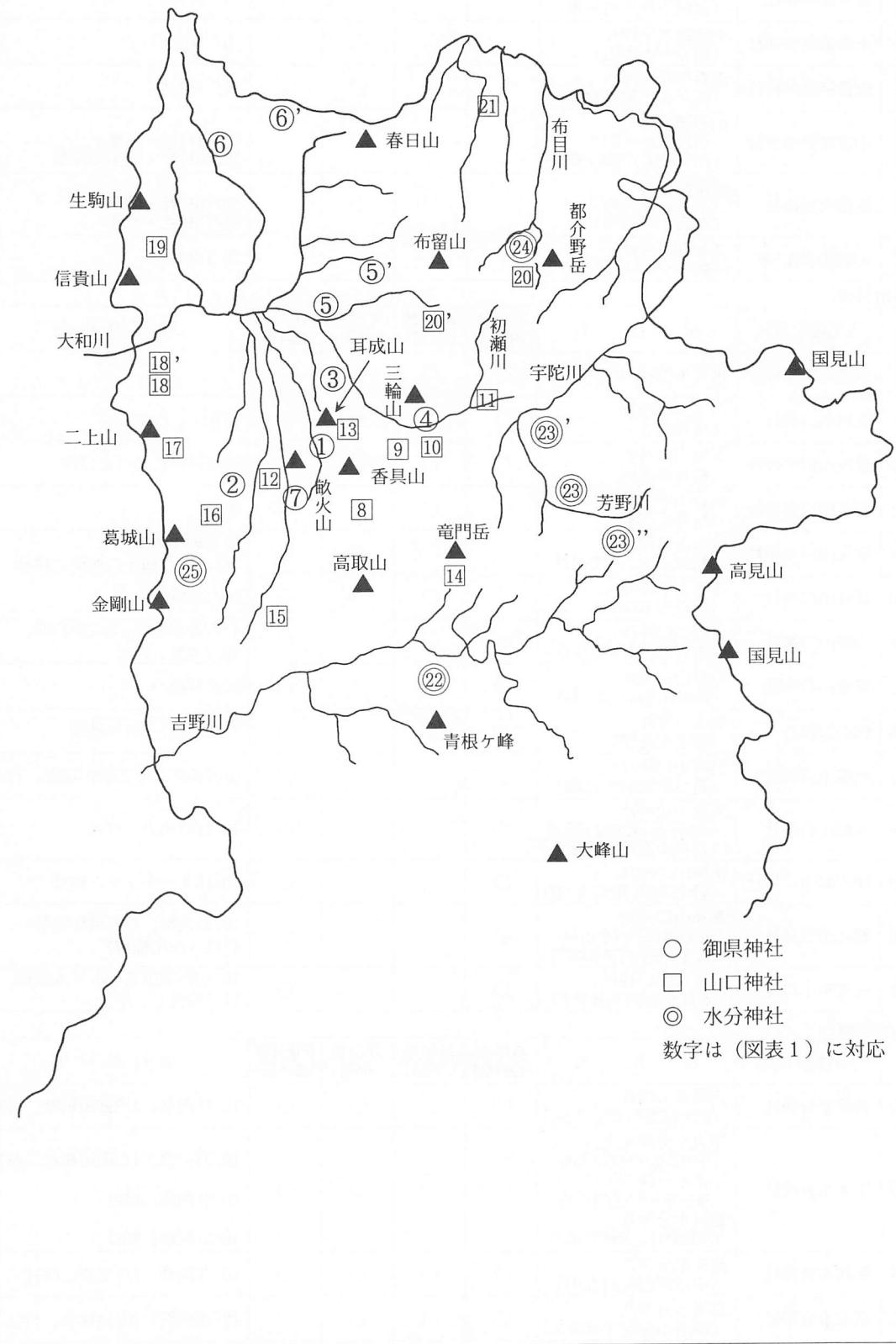
	人名帳記載名	現 社 名	祈年祭 (四時祭)	祈年祭 (祝詞)	月次祭 (祝詞)	祈雨神祭 (臨時祭)	現行祭日等
8	飛鳥山口坐神社	飛鳥坐神社の境内末社	○	○	○	○	
9	石村山口神社	石寸山口神社 (桜井市谷)	○	○	○	○	村社
10	忍坂山口坐神社	忍坂山口神社 (桜井市赤尾)	○	○	○	○	10/15村社、1/7七日座
11	長谷山口坐神社	長谷山口神社 (桜井市初瀬)	○	○	○	○	村社
12	畝火山口坐神社	畝火山口神社 (橿原市大谷町峯山)		○	○	○	2/28御田植祭 2/1、11月初子に埴使、村社
13	耳成山口神社	耳成山口神社 (橿原市木原町)		○	○	○	10/13郷社
14	吉野山口神社	吉野山口神社 (吉野郡吉野町山口)	○			○	4/22御田植祭、9/7衆会祭、 12/7大祭、村社
15	巨勢山口神社	巨勢山口神社 (御所市古瀬字宮ノ谷)	○			○	10/7村社
16	鴨山口神社	鴨山口神社 (御所市櫛羅)	○			○	7/16夏祭、10/16秋祭
17	当麻山口神社	当麻山口神社 (葛城市當麻町當麻)	○			○	9/22例祭、4/22御田植祭、村社
18	大坂山口神社	大坂山口神社 (葛城市香芝町穴虫字宮山) (葛城市香芝町逢坂)	○			○	10/17宮角力、村社
19	伊古麻山口神社	生駒山口神社 (生駒郡平群町櫻原字瀧ノ宮)	○			○	10/10オハキツキ、村社
20	都祁山口神社	都祁山口神社 (山辺郡都祁村小山戸) (天理市杣之内町東垣内)	○			○	10/25例祭、4/25御田植祭 村社（白山権現）
21	夜支布山口神社	夜支布山口神社 (奈良市大柳生町神野宮)	○			○	10/18例祭田楽、8/17太鼓踊 11/1頭渡し、県社

○水分神社

	人名帳記載名	現 社 名	祈年祭 (四時祭)	祈年祭 (祝詞)	月次祭 (祝詞)	祈雨神祭 (臨時祭)	現行祭日等
22	吉野水分神社	吉野水分神社 (吉野郡吉野町吉野山字守)	○	○	○	○	10/16例祭、4/3御田植祭、村社
23	宇太水分神社	宇太水分神社上宮 (宇陀郡菟田野町古市場) 宇太水分神社下宮 (橿原町下井足字水分山) 惣社水分神社 (菟田野町上芳野字山中)	○	○	○	○	10/21例祭、4/3御田植祭、県社 10/21例祭、県社 10/21例祭、郷社
24	都祁水分神社	都祁水分神社 (山辺郡都祁村友田)	○	○	○	○	10/26例祭、7/7夏祭、県社
25	葛木水分神社	葛木水分神社 (御所市閑屋字水守)	○	○	○	○	12/20例祭、10/14秋祭、村社

※「現行祭」欄は、奈良県神社庁参事伊藤典久氏（平成18年当時）の協力の下に調査したものである。

(図表2) ヤマトの御県・山口・水分神社の分布図



稻の豊かな稔りを祈念する神ということがしられる。また、「四時祭」では、山口・水分神社には馬一疋を獻じて祀ることがわかる。「臨時祭」の記述では、「祈雨の神」として祀られる八十五座に山口・水分神社が含まれている。要するに、大和朝廷にとってこれら三種の神社は、生活に深く関わる祭祀を行う神社として位置づけられているわけである。

先に御県神社・山口神社・水分神社が同心円状に分布すると述べたが、それを略地図にあらわしたのが（図表2）である。

このような祭祀のあり方をみると、大和朝廷の政治的な意図によってこれらの神社が祭祀された、もしくは在地の信仰を取り込んで体系化したということは明らかであろう。そもそも、ヤマトという限られた範囲内であっても、御県神社・山口神社・水分神社といった名称がこのように地理的に同じ性格を持った神社に存在すること自体、権力による体系化であることは間違いない、それがヤマトにほとんど限られるということを示していよう。問題なのは、例えば吉野の青根ヶ峰にあったと考えられている吉野水分神社が、先の祝詞にみられるような「稻の豊かな稔りを祈念する神」を祀るものとして大和朝廷に発想される理由である。もちろん、吉野が大和朝廷にとっても、「オナンジ参り」といった民俗にも、ヤマトの国中の地域から「聖水の信仰」を観想されるところではあった⁵。しかし、『延喜式』の祝詞などの根幹が固まったのが飛鳥・藤原京時代だとすれば、吉野の青根ヶ峰に「稻の豊かな稔りを祈念する神」を祀ることには必ずしも妥当性がないように思われる。それは他の葛城・宇陀・都祁の水分の神も同様で、これらは確かに分水・水源の信仰を有するにふさわしい立地にあるが、そこから流れ出す川は飛鳥・藤原京に直接水の恩恵をもたらすものではない。むしろ、飛鳥・藤原京の周辺地域の信仰ということなら、飛鳥川の源流にこそ水分の神が祀られるよう思われる。このことから考えれば、これらの神々はそれぞれヤマト内の地方において発想された信仰を取り込んで体系化されたものと考えるのが至当であろう。ただし、逆に在地の信仰がないのに何らかの理由によって、大和朝廷が祀らせたという可能性もある。

いずれにしても、これらの神社の地域の信仰伝承を丹念に掘り起こしたうえで、考察する必要がある。加えて、広域的な伝承も視野に入れて考えてみたいと思う。本共同研究では、別章で城崎陽子が論じた当麻・吉野山口神社の祭りと、都祁水分・山口神社の祭りを中心に数回実地調査を行った。加えて筆者は、以前吉野・葛城・宇陀の水分神社の祭りを調査した経験があるので⁶、本稿では水分神社の伝承を中心に論じることにする。

2. 都祁水分神社と都祁山口神社の祭りと伝承

（1）遷座伝承をめぐって

都祁の山口神社と水分神社は、他の地域の山口神社と水分神社とは異なって、両神社にかかわる遷座の伝承があり、それに基づいた祭りを伝えている。

都祁水分神社は、奈良市都祁友田町に鎮座している。『延喜式』以外の史料をみると、承和七年（840）に從五位下を授けられ（『続日本後紀』）、仁寿二年（852）に官社に列せられ（『文徳実録』）、貞觀元年（859）に正五位下、風雨祈願の奉幣が行われた（『三代実録』）。一方、都祁山口神社は、奈良市都祁小山戸町に鎮座する。水分神社と同様に史料をみると、水分神社と同じく仁寿二年に官社に列せられ（『文徳実録』）、また貞觀元年に正五位下、風雨祈願の奉幣も同様である（『三代実録』）。これらの記録によれば、この二社は同じように記録に出てくるのであり、明らかに別の神としての扱いを受けているということがわかる。

この両神社の遷座を伝える伝承は、縁起「水分大明神垂跡記」（中世末期から近世初頭に書かれたと推定される）と「老翁伝」（延宝二年（1674））である。それらをまとめると次のような伝承となる。

元慶三年（879）、伊勢国度会郡の玉造村丸が御裳灌川の靈水を持って遊行していた。すると、その水が白龍二匹となって飛翔し、一匹が宇多水分神になり、もう一匹が小山戸庄高山へ降りて都祁水分神になった。この神は度々奇瑞を現すので、小山戸に住む藤原時忠がこれを祀っていた。しかし、この鎮座地までの道は狭隘であったので、^{とちだ}鞆田庄坂窪山に社殿を建てて、天禄二年（971）九月二十五日に遷祀した。これ以来、小山戸の社を上山宮、鞆田の社を下山宮と呼んで、九月二十五日に上山宮へ神を遷し祀り、翌二十六日に下山宮に還御して祀るという祭りが行われるようになった*7。

『大和志料』はこの伝承を紹介して、先にあげた史料とここにある年代が合わないことを根拠に、この伝承の信憑性を否定している。また、都祁水分神社には次のような別の伝承もある。

平安時代の中頃当地区に興福寺喜多院二階堂の荘園が成立しました。蘭生、小山戸、友田、南殿、白石、無山、向淵の七庄で開拓が進むとともに水分神社は信仰を集め、荘園の中央友田に遷し祀られることになりました。天禄三年（972）九月二十五日のことです*8。

この伝承も、遷座の後に山口神社ができることになろうから、『延喜式』をはじめ先の史料と矛盾することになる。

しかし、先にも述べたように、水分神社・山口神社という名称自体が大和朝廷が体系的に付けた名称と考えられるわけで、水分神社は分水嶺・水源地に祀られる神に名付けられ、山口神社は名の如く山の入り口もしくは山の中腹に祀られている神社である。したがって、数キロしか離れておらず渡御の祭りが伝わる二つの神社が、都祁水分神社・都祁山口神社であるとは考えにくい。この都祁は大和高原にあり、木津川の上流である布目川と大和川上流の初瀬川の分水嶺となっている。ということからすれば、この地に祀られるのは水分神社と考えるのが妥当である。最初の鎮座地と伝えられる小山戸字カモエ谷は、社殿の奥が小高い山となっている。この山の尾根には大きな磐座がある（写真1参照）。土地の人はこれを「ゴシャオさん」と呼んでおり、ここに水分の神が降臨したと伝えている。また、同様に社殿の奥には水をたたえた池があり、いかにも水源地を祀るにふさわしいたたずまいである（写真2参照）。

近年はあまり触れられことがなくなったが、近世期の地誌などでは別の神社を都祁山口神社とするものも少なからずあった。『大和志』（享保二十一年（1736））『大和名所図会』（寛政三年（1791））『神名帳考証』（文化十年（1813））などは、天理市杣之内町東垣内^{そまのうち}の都祁山口神社を比定している。

この神社は白山権現とかつては呼ばれていた。また、この地はもとは山口村という地名であった。地理的



写真1 ゴシャオさん



写真2 都祁山口神社の神池

にみれば、大和高原の背後に背負った地にあって、山口神社の鎮座地としての条件が備わっているといえなくもない。実際、石崎正雄は、「広瀬大忌祭祝詞の「倭国能六御県乃山口尔坐皇神」と云ふ場合の山辺御県の山口に坐す神が、都祁山口神と同一であるとすれば、都祁の山の入口にあり、御県神の周辺の此の地に鎮祭されてあっても不自然ではない。」と述べ、杣之内町鎮座の神社が都祁山口神社である可能性を示唆している⁹。このことについてはこれ以上論じる材料をもたないが、在地の伝承が現都祁山口神社を旧都祁水分神社と伝え、地理的条件からみても他の山口神社のあり方からみても都祁山口神社がこの地にあることがふさわしいとは考えられない。そうした本稿の立場からいえば、杣之内町鎮座社であるかどうかは別にして、他に山口神社を求めるべきであるかもしれない。

（2）都祁水分神社と都祁山口神社の祭り

都祁水分神社と都祁山口神社の祭りの秋祭りは、先に述べた遷座の伝承に基づき、神が元の鎮座地に還り、一泊してふたたびもどって来るというものであり、神輿渡御を伴う祭りの一つの典型的な形式である。

祭りに参加するのは、大和高原を分水嶺と仰ぐ二十六ヶ大字（旧都祁村と室生村全部と山添村の一部）に及ぶ。都祁水分神社が鎮座する周辺大字である友田と来迎寺以外の大字は、それぞれに氏神を祀っており、いわゆる二重氏子となっている。

二十六ヶ大字は、「友田」「甲岡」「南之庄」「小山戸」「相河」「蘭生」「来迎寺」「毛原」「下笠間」「上笠間」「深野」「小原」「染田」「多田」「むやまにし」「むやまひがし」「無山西」「無山東」「上深川」「下深川」「荻」「馬場」「針ヶ別所」「小倉」「針」「白石」「吐山」「高塚」である。この中で神社祭祀の中心になるのは二神社周辺の「友田」「甲岡」「南之庄」「小山戸」「相河」「蘭生」「来迎寺」の七ヶ大字であり、ここから氏子総代・責任役員が出る。行列の諸役は、二十六ヶ大字に割り当てられるが、神輿担ぎは七ヶ大字に限られる。相河と甲岡が一名ずつで、あとは二名ずつ出る。

山口神社での行事は小山戸と相河が取り仕切る。これは山口神社がこの二ヶ大字の氏神だからである。小山戸には他にも神社を祀っている。山口神社に渡御して一泊するのだが、神輿を守る「泊まり禰宜」がつく。これは六名で、定まった大字としては無山東と甲岡、残りは順番で四つの大字から選出される。

十月二十五日は「ヨミヤ詣り」と呼ぶ。午前中に神輿に御魂を移し、十三時に山口神社に向けて出御。神輿の順路は決まっているが、以前とは少し変わっている。「カミさんは、上から拝んではいけない」といって、以前は神輿の通り道は高い所を通った。途中、「神輿休み」と呼ばれる決まった場所数カ所で休憩し、十五時半に山口神社到着。ヨミヤ詣りの渡御行列は神輿だけである。

山口神社では神輿が右回りに廻って暴れる。この後神前に奉安され祭典が行われる。これが終わると御供まきがある。

翌二十六日は「本祭り」と呼ばれる。山口神社において十三時に出御の祭典。拝殿前で御神酒・昆布・ジャコを回す。その後山口神社を出立し、御旅所で昼食を摂りながら迎えを待つ。この際には往路にはなかった太鼓がつく。一方、水分神社では、それぞれの「コモリ所」（神社の回廊）に午前中に集まり、宴会を始める。水分神社からの迎えの行列は、13時半出立。行列の順序は次の通りである。



写真3 還御の行列

- | | | |
|-----------------|-----------------------------|-------------|
| 1. 神社記号旗（1人） | 2. 神名旗（2人） | 3. 日月旗（2人） |
| 4. 講社号旗（2人） | 5. 講社号旗（2人） | 6. 講社号旗（1人） |
| 7. 太鼓（1人） | 8. 神社号旗（1人） | 9. 甲冑（1人） |
| 10. 猿田彦（1人） | 11. 獅子頭（1人） | 12. 槍（3人） |
| 13. 頭人児（1人） | （この後各大字の参加者が大字名の書いた旗を持って続く） | |
| 14. 御所幣（五色幣・1人） | 15. 奏楽（1人） | 16. 櫻宣（1人） |
| 17. 祭主（1人） | 18. 櫻宣（1人） | 19. 氏子総代 |

※御旅所から帰路では祭主の前に神輿が入る。

御旅所で神輿を迎える、神社に向けて還御。神社に着くと神輿が暴れた後、回廊の中央にある神輿奉安殿に神輿が奉安され、御魂を本殿に遷して還御祭が行われる。還御祭では、本殿前に頭人児と祭主が向かい合って座る。還御祭が終わると神輿奉安殿で御供まきが行われ、これが終わると祭りが終了する。

この祭りは、古くは春日若宮おん祭りを模倣して行われていたといい、田楽・細男・流鏑馬・能狂言が催されていたと伝えられている。

（3）都祁水分神社の分水嶺としての伝承

都祁水分神社とその周辺は、分水嶺としての伝承が濃厚である。

南側の初瀬川と北側の木津川の分水嶺になっているのだという。広い範囲の大字の信仰を集めるのはそのためで、以前はもっと広く天理市内の大字も来ていたのだという。特に分水嶺になっている家が藪生にあって、家の裏から初瀬に向けて水が流れ、表から木津川に屋根の水が流れ出しているのだという。

（4）都祁水分神社と都祁山口神社の信仰

今日の都祁水分神社と都祁山口神社の信仰を、先に述べた大和朝廷が祀った水分神・山口神というところを除いて考察してみたい。

大和高原に祀られたこの神社の神は、周辺地域（都祁村・室生村・山添村など）の分水・水源の信仰を広く集めている。ただし、この地域が鎌倉初期には興福寺の大乗院領となってその管掌下にあり、神社の祭祀にもそのことが影響したという歴史もある。祭りが春日若宮おん祭りを模倣していたというが、田楽・細男などが奉納されていたということは、興福寺大乗院の権力を象徴的にあらわしている。したがって、それぞれに地区内に氏神を祀りながら、多くの氏子地区が水分神社の祭りに参加しているということは、その影響とも考えられる。しかし、大乗院の影響がなくなり灌漑用水施設が発達して久しいのであって、現在の祭りにいまだに二十六ヶ大字もの氏子地区が参加していることは、分水・水源の信仰が残っていなければあり得ないことであろう。紹介したような分水嶺としての伝承を、現在でも伝えていることがそのことを物語っている。

こうしたことを考えれば、都祁の二つの神社の祭りは水分の神の祭りであって、在地の遷座の伝承は首肯できるものである。祝詞にみられる水分の神の信仰も「稻の豊かな稔りを祈念する」ものであり、この祭りの信仰と一致する。つまり、大和高原を分水・水源とするその山麓・下流地域の水分信仰を大和朝廷が取り込んだものと考えてよかろう。

都祁山口神社についていえば、祝詞が伝えるような「朝廷施設への建材供給と諸国安定を祈念する」という信仰は在地伝承にはまったくみられない。もし、これが古代以来の都祁山口神社だとすれば、在地の伝承とは関係なく、都祁の中でのもう一つの聖地を大和朝廷がヤマトの祭祀を体系化する論理の中でそのように名付けたと考えられる。しかし、水分の神と山口の神は必ず対応するわけではない

から、その必然性は薄い。

3. そのほかの水分神社

(1) 宇陀水分神社

宇陀水分神社は、『延喜式』以外の史料をみると、大同元年（806）に神封一戸が奉られ（『新抄格勅符抄』）、承和七年（840）に従五位下を（『続日本後紀』）、貞觀元年（859）に正五位下を授けられ、風雨祈願の奉弊が行われた（『三代実録』）。宇太水分神社（菟田野町古市場）蔵の「玉岡水分縁起」によれば、宇陀の水分の神は伊勢の五十鈴川から高見山に遷座し、そこから宇陀に鎮座したと伝える。瀬尾満はこれを受け、宇陀の水分信仰は、高見山を水源の神の坐す山とし、芳野川をその尾根の懷から流れる川と意識して形成されたものであろうとする¹⁰。

宇陀の地の水分信仰の濃厚さを示すものとして、水分の神を祀る神社が多くこの地に伝わることがあげられる。古代の宇陀水分神社ではないかと考えられてきたいわゆる論社は三社あるが、それも含めて水分を称する神社は次の通りである。

- ① 宇太水分神社 菟田野町古市場字菟田野（式内論社）
- ② 宇太水分神社 榛原町下井足字水分山（式内論社）
- ③ 総社水分神社 菟田野町上芳野字中山（式内論社）
- ④ 水分神社 大宇陀町平尾字宮ノ谷
- ⑤ 水分神社 室生村下田口字田口西
- ⑥ 水分神社 大宇陀町迫間字子守（明治四十一年に阿紀神社に合祀）

この他にも水分の神にかかる神社がある。

- ⑦ 春日神社 菟田野町見田字水分（旧名水分神社）
- ⑧ 平尾神社 大宇陀町東平尾字宮ノ谷（地元では平尾水分神社と呼ぶ）
- ⑨ 御井神社 榛原町檜牧字高取（祭神四柱中に水分神あり）
- ⑩ 阿蘇神社 菟田野町平井字阿蘇（祭神三柱中に水分神あり）

①～③は論社で、①②は上宮・下宮として平安後期から広大な社領を有していた。③は中世期に豪族芳野氏の勢力拡大に伴って、その影響の範囲を広げていったと思われる。実際、④⑤については今日③から分祀されたものと伝えている。しかし、先に紹介した「玉岡水分縁起」によれば、①からの分祀とされており、この論社の勢力争いは激しかったと考えることができる。地理的にみれば、いずれも芳野川沿いに鎮座しており条件を満たしているが、特に①について小田基彦は宇陀野のほぼ中央に位置し、いくつかの川との合流点に近いこと、三社の中でもっとも早くからの繁栄の記録をもつことから古代の水分神社とするのに穩当としている¹¹。しかし、他のヤマトの水分の神は、水源地と分水嶺に祀られており、小田のいうような条件の神ではない。しかし、いずれにしても芳野川流域に起きた水分信仰が強く信仰されたことにより、多くの神社に分祀されるということになったということはいえるであろう。

一方、祭りのあり方をみると、現在は十月二十、二十一日の両日に総社水分神社から宇太水分神社へ大行列を伴って神輿が渡御する祭りが行われ、①～③の神社が水分信仰をもとに結びついて信仰されていることが知られる。この祭りには菟田野町・大宇陀町・榛原町にまたがる二十九ヶ大字が奉仕する。それぞれの氏子に郷社を祀っていて、この祭りを十月二十日に行って、二十一日に水分神社の祭りに奉仕するという形をとっている。そして、これらの大字では氏神は郷社を指すのであって、

水分神社ではないという意識を強く持っている。この参加大字の問題は、歴史的な変遷もあり、その背後には政治的な権力の影響、町村制の信仰への影響が色濃く出ている。その点については瀬尾・横山聰の論文を参照されたい¹²。

この宇陀水分神社の信仰のあり方は、都祁水分神社のそれと同様であるということもいえるかもしれない。特に氏子地区の郷社の祭りを保持しながら、広域の信仰である水分神社の祭りに奉仕するという関係において同じである。また、史料をたどればそこに政治的な影響も読み取れることも同様である。しかし、そうした影響がなくなった以降も広大な信仰圏が保持されていることも確かに、祝詞にみられる「稻の豊かな稔りを祈念する」という水分の神の信仰は、この在地の信仰と同じなのであり、それを大和朝廷が取り込んだものといえよう。また、二つの水分神社間の神の渡御を伝えるということも、形式的には都祁と同じで興味深い。

(2) 葛城水分神社

葛城水分神社は、『延喜式』以外の史料をみると、承和七年（840）に從五位下を（『続日本後紀』）、貞觀元年（859）に正五位下を受けられ、風雨祈願の奉弊が行われた（『三代実録』）。この記録は他の水分神社と共通する。

鎮座地は金剛・葛城山系から流れ下る水越川の水源地近くである。水越峠は葛城山と金剛山の間にある峠で、反対の河内側にもこの山系から流れ落ちる水を集める川があり、その水源地近くに建水分神社が鎮座している。こうした立地条件にあるので、古くから大和側と河内側との間に水争いが絶えず、特に元禄十四年（1701）に訴訟決着した「元禄の水論」と呼ばれる事件が名高い。

葛城水分神社の祀られた水越川は、谷筋の幾多の天水を集めて東流し、御所市幸町で葛城川に注ぎ、生駒郡広陵町で大和川の支流曾我川に合流する。大和川水系の水源に祀られた水分神である。

この神社の例祭は十二月二十日であるが、もっとも賑わうのは秋祭りと呼ばれる十月十五日の祭りである。この神社の祭りに奉仕するのは、三十七戸の閑屋集落である¹³。この三十七戸が持ち回りで頭屋を務め、四つの垣内（組）から役員が出てこれを補佐して祭りを行う。秋祭りは十月十四日に、ヨミヤ提灯が集落の東端から西端の水越神社まで渡御する。このヨミヤ提灯は、この地方の祭りによく用いられる十個の提灯を付けたススキ提灯である。翌十五日に例祭が行われる。また、十四、十五日には薬車が引き回される。以前は青年団がこれの担い手だったが、今は子どもが引き手になっている。十二月二十日は、先に記した「元禄の水論」が決着した十二月二十一日に因るものと伝えられている。この例祭は、区長・頭屋の他数人が参列するのみの祭りである。

この葛城水分神社の現行の祭りをみると、閑屋集落のみの祭りで、御所地方に多く分布する典型的な頭屋の祭りである。都祁・宇陀の両水分神社にみられた広域の信仰を集めようなものにはなっていない。では、この地の水分信仰自体が薄いものであるのかといえばそうではない。伊藤の論文によれば、元禄の頃には役行者の加持祈祷によって水を引いたとする伝承が吐田郷¹⁴全体に伝わっていたようで、役行者に対する崇敬の念が水分信仰を代表していた。しかし、その後この役の行者に対する信仰ではなく、もう一つの伝承が語られるようになったという。それは、「元禄の水論」に勝利をもたらしてくれた上田角之進に対する伝承であり、信仰である。角之進の具体的な行動に対しての語りはさまざまで、昔から水路があったことを証拠立てようと様々腐心したことが語られ、あまり賢すぎて鉄砲で撃たれたともいわれている。この角之進の功績を称え供養しようとする祭りが、吐田郷内の名柄集落の本久寺に伝わる。本久寺には、角之進の墓と供養塔が伝わり、ここで七月十八日に上田角之進祭りが行われ、五月十日の永代供養の際には特別な扱いで角之進が祀られる¹⁵。このように、水越川の水によって潤されている吐田郷の集落では水分の神に対する信仰は薄いが、この水をもたら

してくれるカミに対する篤い信仰はあるのである。伊藤は次のように述べる。

葛城の水分の神格は、金剛山・葛城山の二つの分水嶺を基点にして、一方で葛城水分神社に昇化しつつも、在地では別ななかたちで確かに語り継がれてきたといえるだろう。東麓のサトから見て、ちょうど〈二上〉の山並みをなす金剛・葛城から聖なる水は流れ下り、サトの生活に恵みをもたらすのであるが、その神格が在地の認識では、近世初頭の役行者から今日の上田角之進へと変化してきたのである。一宗教者から一民衆へ、水分の信仰は変容しつつも語り継がれてきたのであった^{*16}。

古代の葛城の水分信仰が、在地の信仰であるのか遠隔地の大和朝廷が設定したものかわからないが、伊藤が検証した通り、形を変えた水越川の水源についての信仰は濃厚にあるのであって、そうした在地の伝承を取り込んだものがこの地の水分の神なのであろう。

(3) 吉野水分神社

吉野水分神社は、古代の水分四社のうち、もっとも古くからの存在を確認することができる神社である。『続日本紀』文武天皇二年（698）四月二十九日の条に、

馬を芳野水分峯神に奉る。雨を祈ればなり。

という馬を奉っての雨乞いの記述がある。また、万葉集には、

神さぶる岩根こごしき み吉野の水分山を見ればかなしも (卷7・1130)

という水分山をよんだ歌も伝わる。藤原京の時代から、都から離れた吉野の水分山が水の聖地として信仰されていたのである。

これ以降の『延喜式』以外の史料をみると、大同元年（806）に神封一戸が奉られ（『新抄格勅符抄』）、承和七年（840）に從五位下を（『続日本後紀』）、貞觀元年（859）に正五位下を授けられ、風雨祈願の奉弊が行われた（『三代実録』）。

現在の吉野水分神社は、水分山と呼ばれる吉野山字子守に鎮座するが、鎮座地には遷座の伝承がある。吉野の分水嶺で、水分の神が坐すのにふさわしい山として青根ヶ峯がある。この山は、大和朝廷の離宮が営まれた宮滝からも望める山である。青根ヶ峯は北に喜佐谷川が、東に音無川が流れて蜻蛉の滝から西河で吉野川に注ぐ。西には秋野川が流れこれも吉野川に注ぎ、南へも槇尾川・黒滝川が丹生川となり吉野川に注いでいる。また、青根ヶ峯には山頂から西北約一キロのところに元水分社跡と伝えられる場所が伝えられている。宮坂敏和は、遷座の時期を「金峯山修験の発展過程からみて、神封を充てられた大同元年（806）ころか、遅くとも神位を授けられた承和七年（840）または貞觀元年（859）以前」と推定している^{*17}。

吉野水分神社というと、「ミクマリ」が転訛して「ミコモリ」、すなわち子授けの神「子守明神」としての信仰を有している。この信仰はすでに平安中期から盛んで、『枕草子』にも記述がみえ、藤原道長も寛弘四年（1007）八月十一日に金峯山山上の子守明神に金銀五色等を奉っている。こうした子守信仰が水分の神に対して発生するのは、『延喜式』祝詞の豊穣を祈念する意味にも通じているとする論がある^{*18}。

この神社が伝える祭りは、例祭が十月十六日であるが、特に名高いのは四月三日の御田植祭である。この水分神社の氏子は吉野山全域と伝えており、かつては旱魃の際にこれらの人々がこの神社にこもって雨乞いをしたという。しかし、御田植祭に奉仕するのは鎮座地の子守集落の人々である。ただし、昭和の終わり頃まで麓の上市に御田講があり、これに奉仕していたという。山上にあるこの神社に御田植祭が伝わる理由について、その祭日の変遷も含めて城崎陽子の論文に詳しいが^{*19}、本質的には金峯山寺の管掌の下に行われた行事で、それが水分と子守の信仰に支えられて伝承されてきたものとみ

るのが妥当であろう。

吉野水分神社の水分の神としての信仰は、他の水分三社とは異なって、広域の信仰のあり方を確認できない。というのは吉野の水としての信仰には、第1節で述べた大名持神社のオナンジ詣りや丹生川上神社の信仰などもあって、様々に重層する民俗の中で特に子守信仰が早くに水分神社に対して特化されてしまった故かもしれない。

結び—水分神社の信仰にみる世界観

本稿では、大和朝廷が祭祀したヤマトの特徴的な神社群である御県神社・山口神社・水分神社の祭祀と信仰を考察するために、水分神社の信仰をみてきた。

結果として、ヤマトに祀られた水分神社はいずれも分水・水源の信仰を有する地理的条件にあるところに祀られ、現状確認できる信仰には様々な形はあるが、豊かな実りを祈念する『延喜式』祝詞にみられるような信仰を伝えているということが明らかになった。ただし、その水の恵みを得ている広域的な地域が祭りに参画しているのは、政治的な背景がその祭りの歴史の中にみて取れる都祁と宇陀であって、そうした歴史がなければこのような祭りは成立し得ないのかもしれない。要するに、各地に伝わる在地伝承としての分水・水源に対する信仰は、在地においても遠距離の信仰なのであって、それが具体的な祭りの形としては成立することが困難であるということなのであろう。

冒頭、水分・山口・御県といった呼び方も、在地の伝承というより大和朝廷の政治的な意図によって名付けられたことを述べたが、水分神社については「ミクマリ」という呼称にもそのことがいえると思われる。蘭田は『延喜式』の伝本に「ミコマリ」の訓点が水分四座についていることに注目し、これら四座に子安信仰があることを指摘して、三種の神社のあり方に風土の原空間のイメージを想定している^{*20}。しかし、吉野水分神社以外にこの神社を子守とする別称や、こうした性格の信仰を在地の伝承としては見出すことはできない。この子守信仰を生むにはこの神に対して「ミクマリ」と呼ばれている必要があるわけで、他の水分の神にはこうした呼称自体が馴染んでいなかったのかもしれない。そもそも、資料的にも水分の名称がもっとも早くから出てくるのは吉野があるので、この名称は本来吉野の水分に呼ばれた名称であって、都祁・宇陀・葛城には在地伝承としてこうした呼び方があったわけではなく、大和朝廷がヤマトの各地の同様の神を祭祀するにあたって、吉野のそれを共通の神の呼称として名付けたのかもしれない。そもそも、地名を冠した神の呼称は、在地のものであるというよりも外からの視線によって名付けられたものであろう。

御県神社・山口神社・水分神社の祭祀は、飛鳥・藤原京時代の頃には、大和朝廷によって成立していたとみられるが、それはヤマトの風土的な原風景をあらわしているとは必ずしもいえない。つまり、国中にある宮都から、水分四座を水分の神と意識する意識があったわけではなく、ましてやそれが豊穰への信仰に伴って子安信仰という性格をもっていたとは考えられない。むしろ、ヤマトの各地方の中で同様の性格をもった神を、大和朝廷が体系的に同じ名称をつけて祭祀したものと思われる。それは山口の神もまったく同様であろう。そのことは逆にいえば、各地のそれぞれの祭祀を朝廷が政治的に管掌下に置いたことになる。そういう風土的な環境の下で、万葉集の成立基盤であるヤマトの世界観が形成されたのであろう。

注

* 1 景山春樹「自然神道から社殿神道へ」(『月刊歴史手帖』12巻6号、名著出版、1984年)。

- * 2 菊田稔「祭り一原空間の民俗」(『暦と祭事=日本人の季節感覚』日本民俗文化大系第9巻、小学館、1984年、307頁)。
- * 3 伊藤高雄「信仰伝承一分水嶺の神々」(櫻井満・大石泰夫編『葛城山の祭りと伝承』桜楓社、1992年、97頁)。
- * 4 櫻井満「万葉集の成立基盤一大和の六御県をめぐってー」(『國學院大學紀要』十一号、1973年)。
- * 5 櫻井満・岩下均編『吉野の祭りと伝承』桜楓社、1990年。
- * 6 こうした調査は、前掲『吉野の祭りと伝承』(桜楓社、1990年)、前掲『葛城山の祭りと伝承』(桜楓社、1992年)、櫻井満・瀬尾満編『宇陀の祭りと伝承』(おうふう、1995年)に記述された調査に参加したものである。
- * 7 奈良県教育会編『大和志料』(臨川書店、1987年。1928、9年出版の復刻)によって記述した。
- * 8 都祁水分神社発行「都祁水分神社略記」。これによるとこの記述は、応永三十一年(1424)に記された縁起に基づいて記したという。
- * 9 式内社研究会編『式内社調査報告』第三巻、皇學館大学、1982年。
- * 10 瀬尾満「宇陀の風土」(前掲『宇陀の祭りと伝承』おうふう、1995年)。
- * 11 小田基彦「宇太水分神社 惣社水分神社」(谷川健一編『日本の神々』4大和、白水社、1985年)。
- * 12 瀬尾満・横山聰「宇太水分神社の秋祭り」(前掲『宇陀の祭りと伝承』おうふう、1995年)。
- * 13 平成四年(1992)当時。
- * 14 関屋を含む水越川の水が流れる八ヶ村の総称。味がよいことで知られる「吐田米」の産地。
- * 15 伊藤前掲論文。
- * 16 伊藤前掲論文、105頁。
- * 17 宮坂敏和「吉野水分神社」(谷川健一編『日本の神々』4大和、白水社、1985年、512頁)。
- * 18 菊田、宮坂前掲論文。
- * 19 城崎陽子「吉野水分神社御田植祭」(前掲『吉野の祭りと伝承』桜楓社、1990年)。
- * 20 菊田前掲論文。